

# 和名倉百年の森

wanagura hyakunen no mori

NPO 法人百年の森づくりの会

2011  
10.1

22号

巻頭言……1 / 記念講演会 大野晃氏……2-3 /

和名倉山植林ワーク・大血川太陽寺……4-5 / 第4回総会開催……5 /

長瀬苗畑の育苗作業……6 / 長瀬宝登山下草刈り……7 / 百年の森ふれあいコンサート……7

## 国際森林年と限界集落

理事長 内藤 勝久

今年が国連が定めた国際森林年で、同一名称の国際年は国際森林年が初めてという。裏を返せばそれだけ多くの森林が失われたということであろう。1日に東京23区の約半分の森林が消えている現実を踏まえ、森林の持続可能な経営・保全の重要性を広く知ってもらおうと、世界各地で森林をテーマとしたシンポジウムやイベントが年間を通じて開催され、各国の取り組み状況は、9月の国連総会で報告の予定とか。

このような記念すべき年に、当会は第12回埼玉環境賞を受賞。受賞式には小室常務理事も出席した。上田知事から賞状をいただいたときには、これまでの活動が評価されたことに大きな喜びと感動を覚え、目頭が熱くなった。これも偏りに会員の皆様の暖かいご支援のお陰と心より御礼申し上げます。

テレビ埼玉では受賞団体を紹介する番組を企画し、8月11日の「ごごたま」に県立浦和高校3年生で環境委員の追川君と私が生出演させていただき、百年の森づくりの経緯、苦労や喜び、これからの抱負などを簡潔に語らせていただいた。今回の出演をきっかけにして、いままでも取り組みが遅れていた啓蒙活動を積極的に展開していきたいと思う。

さて新聞報道によれば、世界の森林が

1990年から2007年に吸収したCO<sub>2</sub>の量は、この間に化石燃料の燃焼で排出されたCO<sub>2</sub>の約6分の1(約17%)にのぼる。一方、国連環境計画は「生態系と生物多様性の経済学」の報告書を公表し、動植物や森林の保護など生態系保全に年450億ドルを投ずれば長期的には年5兆ドル、100倍以上の経済価値を生み出せるとの試算を紹介している。

国土の約7割が森林の日本は、世界有数の森林大国で、森林の持つ多面的環境保全機能を潤沢に享受しているが、これを経済的に評価すると70兆円にのぼるという。あまりにも恵まれすぎているため森林の大切さがわからず、3.8兆円の累積赤字があるからという理由で、営林署の職員は1964年の88,538人をピークに1990年の5,939人へと、わずか26年の間に82,599人も削減され、その結果、日本の森林を守ってきた山村は寂れ、過疎高齢化が進み、いまでは1万をこえる限界集落が生まれるまでになつてしまった。

私がかねがねボランティアで森をつくることはできない、それは山村の人々の仕事であるといい続けてきたが、そのためにはまず山の仕事を生業とする人々、特に若者が定住できる経済的基盤が確立されなければならぬと考えてきた。し

かし都会人以上かかる生活費をどう稼ぎ出すか。林業、農業、観光業といったことから有望な産業もあるが、軌道に乗せるまでには時間がかかるし、全額を賄うことは難しい。いつも財源の確保が壁となりその先に進むことができず無力感に陥っていた。

今年の総会の記念講演会は5月になつても講師が決まらなかつた。最悪の場合の候補は考えていたが知名度に欠けるのであと数日待つことにする。忘れもしない5月8日、日経新聞の夕刊を開くと限界集落の権威で名付け親の大野晃先生のインタビュー記事が大きく掲載されていて、そこに私が行き詰まっていた問題の解があった。「森林・山村再生法」の制定である。さっそく先生に講師の依頼状を差し上げる。面識もない上、超多忙の活動をされておられるので99%は無理と思っていたところ、ちょうどその日だけが空いていて、しかも私の考えに共鳴したので受諾する、とのご返事。女神に今回も救われた。

90分にわたる講演は実例をふんだんに取り入れた内容で分かりやすく、しかも法律の制定という限界集落解消の具体策までお示しいただき、今後の活動の大きな目標を定めることができた。これも国際森林年のお陰と深謝している。

講演報告書 平成23年5月29日

## 「森林と山村の再生から明日の日本を」

高知大学名誉教授  
札幌学院大学客員教授  
長野大学環境ツーリズム学部教授  
大野 晃 先生

地下足袋にザックで全国を回るいつもの雰囲気でも会場にいられた教授は、今日は講演ということもあり、ネクタイ姿で、次の四つの骨子で話を始められた。以下はその講演内容を基に添付資料からの抜粋も加え、粗雑にまとめた報告書です。

- ① 過疎法(過疎地域自立促進特別措置法)の40年と限界集落
  - ② 山の荒廃と流域共同管理
  - ③ 森林山村の再生とその具体化
  - ④ 地域再生の担い手づくり、教育
- 過疎法は40年、更に6年延長して施行され総計96兆円が注ぎ込まれた。その目的は「地域の自立促進を図り、もって住民福祉の向上、雇用の増大、

地域格差の是正及び美しく風格のある国土の形成に寄与すること」とある。その結果、日本はどう変わって来たのか。どこへ行っても舗装され、上下水道も普及といったハード面は大いに進んだ。地域格差や美しい景観はどうなって行ったのか。65歳以上の高齢者が住民の半数以上を占め、共同体機能が低下している「限界集落」の数は2010年4月時点で10,091にのぼることが4月20日、総務省の過疎地に関する調査で分かった。2006年度の前回調査から2,213

増加。調査地域の集落総数に占める割合も12.7%から15.5%に上昇した。有効な対策がなく、多額の税金が投入されてもなお、歯止めがかからない実態が明らかになった。限界集落の増加により何が生ずるのか。一つは伝統芸能、伝統文化の衰退である。例えば神楽だ。村にいたるものにとつても、村を去ったものにとつても子供の頃から親しんできた神楽は、自分が生まれた郷里の誇りだ。神楽が村から消えることは、村の伝統芸能が喪失するに留まらず、心の支えを失うことである。これは、人間の生き様にも影響を及ぼすものだ。第二は森林の人工林化とその荒廃による山村の原風景の喪失だ。春夏秋冬、季節ごとに美しい景色を見せてくれる「山」。「田毎の月」と謳われ俳句や短歌に詠まれ親しまれてきた棚田。こうした山村の風景を通して私たちは、世界に誇る日本文化の基層をなす日本人固有の叙情性豊かな感性を培ってきた。原風景の喪失は日本人の感性の喪失に深く結びついており、これは現代人の社会病理の表出と無関係ではない。

第三に問われなければならないのは山の荒廃である。集落の働き手を失うことよって田んぼや畑ばかりでなく、森林も放置される。その背景には安い外材が入って来ることにより、利益を得られない森林は放置されるという実態も存在する。

山と川と海は自然生態系として有機的に結びついている総体的存在である。山・川・海のそれぞれにつながる地域環境のなかに「人間と自然」の豊かさを創造していく具体的道筋を明らかにすることが、現代に生きるわれわれに課せられた大きな課題である。奄美大島では地域格差を無くすという名目で、

公共事業が投入された。島のあちこちで工事が行われた結果年間降水量3000ミリを越す雨が降る度に工事現場から赤土が流出され、青く澄んだ奄美の海は赤く染まり、死の海と化した。海産物が取れなくなった海では仕事が出来なくなり、若者は働くために島を出て行かざるを得なかった。また、工事により住み処を奪われた野鳥は姿を消し、荒廃し保水力を失った人工林は水枯れの沢を生むだけでなく、時として鉄砲水と呼び、これが川底を変えて水生昆虫やエビ、カニ、川魚のすみかを奪う。また、線香林が部分的林地崩壊を招き、むき出しの表土が雨で河口に流され、これが沈殿堆積して磯枯れした死の海をつくり出した。保水力の低下した山は、「山」だけの問題ではなく濁水や洪水という形で、下流域の都市住民や漁業者の生産と生活に大きな障害を及ぼしている。それ故、「限界集落と沈黙の林」に象徴される現代

山村の問題は、下流域の都市住民や漁業者にとつて対岸の火事では済まされなくなってきたとおり、いま国民総意で取り組まなければならない段階にきている。私はひとの禰を担ぐのが嫌いで、ひとの本を余り読まない勉強嫌いで、現地に行き人の話を聞き実態を見て論理を構築し、政策を作り提言して来た。それが主な活動であった。百年の森づくり成果が載る『樹還』を読みながらこれからも鋭意努力して行かなければならないと思った。皆さんの森への熱い思いがこれからも一層続いて行くように願っている。

今、我々は山・川・海をどう保全していったら良いのか問われている。「環境汚染型流域」から「環境保全型流域」への転換が求められている。山の豊かさは川や海の豊かさにつながり、それは人々の生活の豊かさにつながり、水源のある山村だけではなくそこから続く下流域全体で流域を守っていく必要がある。網走川流域の問題でも明らかのように、山だけを豊かにしても下流域の漁業も良くなるとは限らない。中流域に位置する農業には作物を育てるために必要な化学肥料や農薬が多く使われ、それらが川に流れ出る。環境保全型の農業になって貰わないと安心して漁業が出来ない。漁場環境の保全のために森林組合、農協、漁協、三者が同じテーブルに集まりその方法を話し合った。その結果、河川の流域を共同管理していくことで密な産業と地域再生が可能となる、という合意を得、津別町の農業では有機農業、オーガニック牛乳など環境保全型を進め成功し

ている。

さて、次に山そのもの、森林山村をどう再生していったら良いのか。その問いに対しては「自分たちの地域は自分たちの手で政策提案型地域づくりを提案した。日本は国↓県↓市↓町↓自治会という形で上からの政策が下々まで降りてゆく。これは世界に類を見ないものである。下から上への声はほとんどなく戦後民主主義の欠落した点でもある。住民の主体的な活動がなければ本当の民主主義と自立は育って行かない。これなくして山村の地域再生は難しい。自分達の課題は何かそれらを整理し自分達の出来る事と出来ない事を分けて集落で解決してゆく。行政の後押しがあれば一歩進む事もある。整理をすることで、解決策をまとめ行政を巻き込み発表して行く。津別町では農家の50人が長期計画を策定し行政がそれに沿って進めている。山村と山村が集まって話し合う。福島の限界集落である銀山町では第2回目のプランを発表会で提案した。森林山村の再生には住民にそういったベースが不可欠である。山村ではどういった具体的な政策が必要なのか。山村で暮らす人々は10人中10人がここで暮らすと暮らしたいと考えている。都会に出て娘のアパートで孫の世話をする、自分の部屋はない、交通量が多く危ないからと部屋にすることが多くなる。いたたまれなくなり山村に帰るとまずすることは臭いを嗅ぐことだ。何故山村が良いのかと尋ねると「ストレスのない状態だから」と言う。それならば、そこで暮らして行ける仕組みづくりが必要である。そこで、ライフミニマム(人間が生きていくうえで、最低限度の生活条件)として山の駅(多目的施設)を提案した。山村には生活拠点が無い。行政に働きかけても「金がない」でお仕舞いになる。それなら知恵を働かせれば良い。日本にはどこに行つて

も集会所がある。それを利用する。集落はみんな自分たちで管理してきた。収穫した作物は一箇所にまとめる場所があった。共同で使う水車は皆で管理して来た。外国に行つてもそんなところは何処にもない。読み書きそんなものが出来、地域の管理が出来るのは日本特有のものだ。都会の人はめんどくさいとか言うが年に3回年金を受け取るために集会所に来る。野菜などは曜日を決めて配達してもらって生活ができる。そのシステムをつくるのが本来行政の働きではないか。

市町村は国の補助事業を行う。県は何をするかという、例えば高知県では環境税として1人500円を徴収し人工林の整備に当てる。20億は掛かると言われている森林保全の予算としては全く足りない。国はやるべき事として「森林・山村再生法」を提起した。国土の8割を森林が占めている。自然環境の保全に重要な役割を果たしている山村自治体に対して、人口による交付金に加えて、林野率、林野面積を基準とする「環境保全寄与率」に応じた「森林環境保全交付金」を配分する。山村は人口が減少すれば交付金も減るが、膨大な面積の山を持つてくる。その交付金で若者の雇用の場をつくり荒廃した森林の整備を進め、保水力のある豊かな森林をつくり、素晴らしい景観を見せてくれる森を再生することで山村の存続を図る。国民総意の下に山村が蘇る。若い人にはかつて山仕事は3K職場という意識があった。それらをクリアして今ではエコ、環境保全への関心が高まっている。国がシステムをつくる事で山の仕事が保証され若い人と年寄りのコミュニティの和が拡がる。山間への投資効率は良くないからと限界集落に住んでいるお年寄りを都市に集めれば本当に豊かな生活があるのか。そんな簡単な事ではない。新しい環境に適応する時に生ずるストレスが死期を早める。お年寄りが公営住宅に入り、より投資効率を上げ

る仕組みとしてのコンパクトシティを合理的につき崩す論理はなかなかない。都市の周りには山々があり、その山村に人が居なくなれば山は荒廃し、日照りが続けば渇水になり、雨が降れば都市水害の問題が出てくる。人間と自然が共に豊かな地域社会をどう実現してゆくのかが。まず、森林と山村の再生し、下流域の人達に安心した生活を提供すること。そして、日本全体の素晴らしい景観を保全し同時にそれをいつでも享受できる国民をつくってゆく。日本文化の基層をなす叙情性豊かな感性を取り戻しそのような展望を持つて、森林・山村再生法の早期創設といった問題を考える必要があるではないか。

こういった山村の課題は我々大人だけのものではなく、今の小学生、中学生、若い人たちのものでもある。日本の将来を担う子供たちにきちんとした体制を作つてゆくのが我々大人の責任である。それが教育といったものである。秋田へ講演に行った時に僕のファンになつてくれた小学校の先生は、自分の問題ではなく今の子供たちの問題としてこれを捉え、自分たちが暮らす地域の過疎・高齢化について学習の中で取り上げ、共に学んでいる。その授業と呼ばれて限界集落の話をした。金がない国立大学は調査費に研究費が1円も使えない仕組みになっている。宿泊費も交通費も出ない調査活動をどうやって続けたか。現地でのたかりである。営林署の独身寮は1泊300円で泊まることができた。次の日あそこの家へ行けば飯は食べられると教えてもらい行くと、土佐の高知とは違つて何も話さずぶすーっとしたばあちゃんがいる。朝方、恐る恐る海苔はいらんから塩結びを作つてくれないかと頼む。現場まで連れていってもらい、帰りは営林署の車に乗せてもらおう。その恩返しをしなければならぬと思えて

きた。いつも森林伐採をやっている人たちの思いを背負いながらどうしたら集落が豊かになるのか、そういった責任を感じながら調査活動を続けた。どこへ行つても大学の先生に見られたことはなかった。五島列島ファン倶楽部では高校生を対象にしたサイエンスキャンプ、文科省がらみの事業で高校生にきちんとした自然科学を学ぶためのフィールドと座学が組まれている。500メートル四方の広さを持つフィールドは1時間半で山・川・海・田畑を体験できる。廃校となった小学校を新たな拠点とし、ここを通して、将来の展望を持ち社会に出て行ける力を身に付けた若者を要請してゆく。「樹還」には、浦高、熊谷高校、川越高校など高校生を入れないながら活動を進めている事が出ている。これからの時代を担う、担い手の問題として子供たちを育成してゆくことは重要であるとの頃はすーっと感じていた。

最後に皆さんが活動している内容は非常に素晴らしと思う。日本ユネスコ協会が09年から始めている未来遺産プロジェクトをご存知ですか。日本の自然や文化や色々な意味での景観を残し、百年後の子供たちにきちんと伝えるべくプロジェクトである。未来遺産運動という名目で提起し、応募の中から1年に10件選び、1件につき50万円を出している。活動が盛り上がりればと私も賛同人となっている。百年の森もこのプロジェクトに応募したらと思つている。

最後に「地方の疲弊は山と村々の荒廃から起こった。地方の再生は森林と山村の豊かさの復活から始まる」。この言葉を講演の締めにしたと思います。

文責 守谷 裕之

2011年度上半期

## 和名倉山森づくり報告

和名倉山森づくり事業担当 高岡正彦

まずは、4月2・3日仁田小屋の修復と和名倉山の食害調査に入りました。

8名で装備類100kg分を分担して担ぎあげりました。最近参加者が減ったのは、この荷揚げ作業が原因かもしれません。

小屋に着くと、直ちに作業開始。小屋下のフォレストベンチのネットの修復と煙突の付け替えを同時に作業しました。翌日は壊れかけたトイレまでの回廊を修復、実際に手際のいい作業でした。・・・でも最後は、少々疲れました。



この時、仁田小屋の頭付近を偵察したところ、鹿の食害がひどく、また、「一步の森」のネットが雪の重みで大半倒れているのを確認しました。



次に、第28回和名倉山森づくり事業5月21・22日は、植林活動+ネットの修復作業を行いました。

今回も、やや参加者が少なかったですが、50本の冷温ブナを担ぎ上げ、仁田小屋の頭の直ぐ下の植林地に終えました。ここは、前回植林した場所ですが、ネットを十分に張っていませんでした。ですのでやはり鹿に齧られているものが多かったです。



今回は、ネットの修復がメイン

と考えてきました。

「一步の森」では、2001年最初に植えたブナが、広く枝を伸ばして成長していました。そのとき植えたのは13本でしたが、その中で唯一残っているブナです。



次に、大陽寺植林地作業（ツルきり。ネット巻き）は、6月25・26日に行いました。

この事業は、2002年に和名倉山のような奥山でなく、里山においての植林活動として始めたものです。今は下草刈りやツルきり作業がメインです。しかし最近、外を取り囲む大きなネットが倒れ、鹿の餌食になっています。ですので昨年からは植林した木に、ネット

トを巻く作業も行っています。今回は、天候が悪かったのでツルきを2時間、ネット巻き2時間の作業でした。植林した木はとて大きくなっています。

栗は実をつけています。和名倉山へ植林したものはまるで成長のスピードが違います。

さて、この事業と直接関係ないのですが、この大陽寺での作業のときは、必ず旧大滝小学校三峰分校に宿泊しています。

ここは、以前「百年の森づくりの会」も使わせてもらったのですが、2008年高等学校体育連盟登山部が、インターハイを行うときにスタッフのための宿舎として使わせてもらったものです。今は、埼玉山岳連盟自然保護委員会が管理していて、自然保護活動の研修会・自然観察会などの拠点として使わせてもらっています。

今年の8月にはこのトイレを水洗トイレにすることができました。より一層使いやすいものになって





います。埼玉岳連自然保護委員会はこの分校を「岳人の家」と称して、活動を膨らましています。実は、「百年の森づくりの会」の名倉山事業の装備はここに保管させてもらっています。ご利用については高岡までご連絡下さい。

さて、その埼玉岳連自然保護委員会の自然観察会が9月10・11日にありました。当初、和名倉山までの観察会でしたが、今年の台風によって、大洞林道（雲取林道）の数箇所で崩落があり、通行止めになっています。三峯神社との分岐から2kmの所に最初の崩落があります。

結局、林道の観察と、仁田小屋までの荷揚げになってしまいました。



写真は大洞林道最高地点付近です。一番は大きな崩落現場です。大量の土砂が上部から押し寄せています。



旧大滝小学校三峰分校（「岳人の家」）です。歴史を感じる素敵な建物です。真ん中の玄関口の屋根はペンキで修復しました。

## 平成23年度第4回通常総会開催

NPO法人百年の森づくりの会の平成23年度第4回通常総会が、5月29日（日）別所沼会館において開催されました。

当日は、平成22年度事業報告・収支決算案、平成23年度事業計画・収支予算案を審議いただき満場一致で原案通り承認されました。

また、任期満了に伴い役員を選任案について、全ての役員を再任すること提案し、満場一致で原案通り承認されました。

新役員は、以下の通りです。

（敬称略）

理事長 内藤勝久

副理事長 東 克明 小林公彦

高岡正彦

常務理事 石関明稔 小室正人

野澤和雄 守谷裕之

吉田兼紀

理事 浅野純次 大熊光治

坂本和穂

監事 宇津木正晴 玉熊英一

これからも宜しくお願いいたします。

総会終了後、「森林・山村の再生から明日の日本を」と題して、長野大学環境ツーリズム学部教授大野晃氏をお招きして記念講演会を開催しました。



# 長瀨苗畑作業報告

常務理事 野澤和雄

三月十日(木)十日(金)参加者 3名  
作業内容

日大生物資源科学部の鍛代先生と2名の学生による「百年の森・日大共同研究実験」が行なわれました。ミニユンポで樵苗を掘起し根をすくって、その根をどの位まで剪定しても生残れるか、4段階に群を分けました。各々60本ずつ計240本、長短(支根は全て切り取った状態が一群)の根をつけた苗が畑に戻され土をかければ根を踏固められました。三人ともモクモクと2日間鍬と鋏を動かしました。2日目(3/11)は午後2時すぎ、たまたま大地震がありました。日没までモクモクと作業が続けられ、全ての苗を畑に仕立ててから全員帰宅。(後日談で川崎に帰宅したのは翌朝だったそうです。)

四月十七日(日)参加者 3名  
作業内容

ポット苗内と苗履屋周囲の除草作業と給水装置の修繕  
まだ雑草も小さく、根も勢力

五月十五日(日)参加者 6名  
作業内容

を張っていなかったので畑もポット苗内も除草が楽でピクニック気分でした。  
小型のポットから大型のものへ樵苗の仕立直しとポット内除草。直播畑の草取。  
急激に陽射が強くなり、雑草がはびこって梃子摺るようになりました。今年は東日本大震災で仲間が東北のボランティア活動に向い、畑の作業が手薄であります。  
でも三陸のガレキ処理のあい間を縫って長瀨の畑に集ってくれました。

六月十二日(日)参加者 10名  
作業内容

ポット苗内の除草と牛乳パックの仕立直し。  
(牛乳パックが経年変化で貼合せのノリがはげて土が零れるようになりました。)  
前日から用意しておいた黒土と腐葉土を左官舟で混合させ、ポットをならべて鹿沼土を底に敷込む班。牛乳パックから

取出した苗を鹿沼土の上に設定し、混合された土で根固める班。除草された履屋の内にトレーに乗せた苗を敷置、散水する班。1,000本強が半日で効率よく仕立られ、トレーで整列すると再度散水がされて終了しました。水を吸った黒土の発する冷気と苗の緑が映えてすがすがしさが際立った畑作業でした。

七月三日(日)参加者 7名  
作業内容

苗畑作業を取止め、宝登山に冷蔵樵の補植。百年の森植林地の看板前に冷蔵樵を50本揃えた。各自7、8ヶ処穴を掘って植栽。ただ冷蔵庫が一時停電して外壁の温度が上昇してしまい、壁に接触して苗の袋だけ樵が黄緑の芽を吹出しました。20本位がその状態だったので根付きが心配されました。植栽後一週間は雨が降らなかった。この二つの要因でさすがの冷蔵苗も6割位の根つき率でさんたんたる結果になりました。

秋口に樵をどの位和名倉山へ持込めるか。秩父夜祭(12月3日)あたりには確実に冬芽をつける樵を冷温苗として冷蔵庫にどの位保存するのか。  
苗畑の樵は1,200本くらいあります。会員の皆様の奮起に期待します。  
樵をもっともつと和名倉山に放流してやりたいものです。



2011年8月21日(日)

# 長瀬宝登山下刈り活動報告

長瀬宝登山百年の森は、2007年10月28日に植樹を行い、4年が過ぎ植えられた苗木もすっかり活着し大きな葉を広げるようになりました。夏の下草刈りも、2008年、2009年、2010年、2011年と4年目の草刈りです。

8月21日当日は、曇天時々小雨という草刈りには最適な天候で、暑くもなく作業しやすい日でした。参加者は昨年の倍以上の107名の方が参加してくれました。特に、三井住友海上火災保険株式会社埼玉支店から65名の方が参加してくれました。また、今年も県立いずみ高校から生徒16名、先生5名の合わせて21名の参加がありました。百年の森づくりの会からは21名の参加がありました。9時にロープウェイ駅駐車で開会式を行い、内藤理事長の挨拶をはじめ大澤長瀬町長、梶田県立いずみ高校校長、長尾三井住友海上火災保険(株)埼玉支店長の御挨拶を受け、同駐車場を出発、徒歩、作業車、ロープウェイとそれぞれの方法で現場に向かい、10時には6班に分かれて作業にかかりました。曇り時々小雨

のお陰で、昨年に比べると格段に作業しやすい中で、皆さん山の苗木のため一生懸命草を刈っていただき、11時30分にはおおむねの草を刈り終わりことができました。作業を終了し、鎌を研いで道具を片付け、事故、怪我もなく活動を終了することが出来ました。

参加された皆さんには、本当にご苦労様でした。  
(事務局)



# 百年の森ふれあいコンサート

九月四日、皆野町文化会館で、百年の森ふれあいコンサートが開かれました。

天候が危ぶまれる中、大勢の方に来ていただきました。

十回目を迎えることができたふれあいコンサート、長かったような短かったような。

この十年の間に、人々の心の中に、山や森は、人間にとって切り離せないものとして違和感なく受け入れられるようになりました。秩父でもいろいろな組織による植林活動が行われています。

百森の記録映画を見たり、会長のお話を聞いたり、いくらかPR致しまして演奏会は始まりました。

コール四季のみなさんのやさしい歌声、秩父高等学校音楽部の若い歌声、

演奏は、ピアノ、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、フルートでじっくりと楽しませていただきました。

最後はいつもの「ふるさと」の全員



合唱です。皆さんそれぞれ思い浮かべる情景は違うかもしれませんが、地震、つなみ、台風、原発と幾重にも重なった苦難を乗り越えて、前へ進まなければならない思いを強くする、今年のコンサートでした。



「宝登山の山栗」

■新会員（会員番号 氏名 住所）2011.4 ～ 2011.9

944 小林繁 東京都 / 945 上野可津美 飯能市 / 946 黒田清 鳩ヶ谷市

和名倉百年の森 第22号 2011年10月1日発行

発行者：NPO法人百年の森づくりの会 内藤勝久

NPO法人百年の森づくりの会 事務局

〒330-0063 さいたま市浦和区高砂三丁目12-9 農林会館地下1階 TEL/FAX：048-831-1469

<http://www.100nen-forest.org> e-mail：info@100nen-forest.org